

## 第7回 ニッケピュアハート エッセー大賞

<中学の部 優秀賞>

「ぼくはぼくでいいんだ」

藤原史貴

ぼくは、三人兄弟の末っ子。一番上の兄は勉強ができ、すぐ上の兄はサッカーが上手である。両親からは、別に比べられているわけではないけれど、ずっとコンプレックスに思っている。自分には、とりわけ得意なものとか、ずばぬけて頭がいいとか、そんな人に自慢できるものが何一つないのである。

“どうせぼくなんて…” がログセなぼく。

それを聞いた両親は、“何言ってるの。がんばって！” と、いつもはげましてくれる。がんばってる。いつだってがんばってる。それがむくわれないのだ。

ある日、母がぼくにこう言った。

「あなたを産んでよかった。いつもやさしいあなたがいるだけで、うれしいし、楽しい。ありがとう。」

って。なにげない一言。でもそれがすごくうれしかった。仕事でいそがしい母のかわりにせんたくものを取りこんだりしている。たったそれだけの手伝いにも、母は喜んでくれている。ぼくはぼくでいいんだ。ぼくはぼくのできることをがんばっていこう。そう思えた瞬間だった。

ぼくの夢、それは、家族や友だち、また、まわりの人々を大切にし、みんなからも愛される存在になることである。その夢の実現のためには、今の自分に自信をもち、今とかわらず、やさしい自分でありつづけようと思っている。“ぼくはぼくでいいんだ” ということをわすれないで、前向きに生きていこうと思うのである。